山梨新報「直言」原稿

二〇〇九年四月二四日

「迷えば深きよものむら雲」

山梨県立大学長　伊藤　洋

「奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人にしらせむ」（後鳥羽上皇）

またまた旧くて新しい「政治と金」の問題が出来した。目の粗いことでは夙に有名な「政治資金規正法」を使って、しかも「国策捜査」と揶揄される格好のタイミングで、野党党首の公設第一秘書を逮捕するという蛮勇には驚いたが、「悪」を懲らしめるに好い時期だの悪い時期だのがあるわけも無いから、司法当局には手加減せずに与野党問わず全事件を判じてもらいたい。

こういう事件が起るたびに「政治倫理」という伝統的な問題が思い出され熱心に議論される。だが、結論はいつもうやむや。結果は、政治資金規正法に付則が一行増えるだけ。しかも、しばらくすると次なる事件の種が確実に土中深く蒔かれて、いつの日か発芽する。

ところで、初詣に賑わう神社仏閣の賽銭箱。ここには一円玉から万札まで「善男善女」の「尊い祈願」が投げ込まれる。無病息災から除災招福、商売繁盛、家内安全まで、喜捨の意図は野放図だ。庶民がするこの「尊い願」を、ご本尊に対する買収行為とまでは言わないが、つまるところ欲望の「発注」にほかならない。政治資金とは畢竟「政治的お賽銭」である。さすが真理をもってする神や仏は、寄進者の慾得には見向きもしないが、こと志操堅固なら政治家となれば、それがそうは行かない。お賽銭の多い者に幸運を多く加配することとなる。

この国の民が宿痾から解放されないのは政治的志操「不」堅固な人物を政治家に選出するからである。つまり、政治資金を不純ならしめているのは我ら選挙民の責任なのであって、その反省が無いから、百年河清を待つ仕儀と相成るのである。

「奥山のおどろ」の下にすらなお有る「人間の道」、それは我ら日本人が未発見の「人倫の道」だ。国立大学の学長選挙にすら買収・供応があったなどという噂が絶えない。後鳥羽上皇ならずとも怒

りたくなる末世ではないか。

「昔には神も仏もはらぬを下れる世とは人のこころぞ」（後鳥羽上皇）

こうして志操堅固ならざる人物が指導的地位に着く。いかに末法の世とは言え、昔と同じく神も仏も有るのであろうから、かくも世が末に成り下がったについては、つまるところ「人の心」に起因するのである。

その好古？の一例が、あの中川昭一元財務・金融担当大臣の主要７カ国財務相・中央銀行総裁会議後の「酩酊」記者会見である。一国を代表して国際会議、それも今世界を覆う「百年に一度」内閣総理大臣がのたまうと「経済恐慌」退治を議論しそうている大会議に出て、その成果を世界に発信しようというその記者会見場よりくに「酩酊」したまま出てくる。人を食ったド太い態度ではないか。

しかも、近くにいれば匂いもしよう、鼻息も聞こえように、一国の金融の最高責任者が控えめに臨んで随伴して記者会見にえ裁は、後刻生ずべき結果は、日銀総あの時、職を賭してを忖度すれば、職を失うほどの方向感覚すら失う、質問者に「酩酊」し、臣に、指を指すから分かって方角を教えてやる誠実さは、二文字の付く「正直」さである。

この「事件」には更に問題がある。この「酩酊」が詳らかになったのはイギリスはじめ海外メディアがそれぞれの国で放映し大笑いになったからである。日本の大メディアは、大臣のうつろな目付きの映像をカットして放映したのは、「酩酊」を知った日本国民が世界最後だったという。民主主義の基本である国民の知る権利を支えるマスメディアにしてこれであるる。

この失態に、任命権者の麻生太郎首相は、進退は個人の問題と訳の分からないことを言って責任を回避した。「酩酊」の原因を風邪薬にあるというのは陳述を利用したダメージをもろに甚大なる身体服用のうすだろうが、大人の薬を与えるとかく、薬事行政の責任を、首相は厳しく追及しなければならない。結局、世論の猛反発に耐え切れなかった。当事者自身が辞任するべきであるる。

一件は落着した。「政治倫理」が決着もて通せりたわけではなかった。

「おしなべて空しき空のうすみどり迷へばふかきよもぎむら雲」（後鳥羽上皇）。承久の変（１２２１年）の時代から変わることなく国の四方に暗雲が垂れ込めている。